Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-13

ゴットヘルフ『黒い蜘蛛』の食事の場面に見られる聖書の影響について

菱川，涼子

(Citation)
DA,8:39-48

(Issue Date)
2011

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002974

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002974

ゴットヘルフ『黒い蜘蛛』の食事の場面に見られる聖書の影響について

菱　川　涼　子

イェレミアス・ゴットヘルフ（Jeremias Gotthelf, 1797～1854）の『黒い蜘蛛』（*Die schwarze Spinne*, 1841）[1]は、ある家の主人が孫の洗礼式の日に家の柱の由来を語り、洗礼を祝うために集まった客たちがそれを聞くという趣向の短編小説である。この作品は、作者ゴットヘルフが牧師だったこともあり、神や悪魔が登場するなど、聖書の世界観を反映している。物語の背景となっている「洗礼式」や、悪魔が信仰の力によって柱に閉じ込められるという話の流れからも、聖書からの影響は看過できないものだと言えるだろう。

『黒い蜘蛛』の舞台となっている村はアルプスの谷間にあり、物語の中では、生まれて間もない赤ん坊の洗礼式とそのお祝いの食事会が行なわれる。そして、その赤ん坊の祖父にあたる家の主人は、かつて村で領主の圧政によって農民が苦しんでいたこと、領主が命じた過酷な労働のために村人が悪魔と契約したこと、悪魔と契約したことによって村で惨劇が繰り返し起きたことなどを語る。悪魔との契約の物語と、契約したあとに起こった一連の惨劇の物語は、神と悪魔の対比や勧善懲悪、信仰の大切さをテーマにしている。たとえば、タイトルにもなっている黒い蜘蛛は、悪を具現化させたものだと考えられるが、この蜘蛛は登場人物のクリスティーネが悪魔と契約することによって現れて、多くの人々を殺す。またその際、信仰心のないふるまいをする者から蜘蛛によって殺されていき、蜘蛛を家の柱

[1] Gotthelf, Jeremias : *Die schwarze Spinne*. Stuttgart; Reclam, 2002. 以下本稿での引用は、イェレミアス・ゴットヘルフ『黒い蜘蛛』山崎章甫訳、岩波書店、1995年による。

に閉じ込めることができる人や、蜘蛛の災禍から逃れることができる人は信仰が篤い人々である。聖書の考え方によると、悪魔に少しでも手を貸すものは、最終的には悪魔に魂を差し出すことになるので、[2]『黒い蜘蛛』は悪魔と契約することを戒めた物語だととらえることができる。そして、蜘蛛と戦って退けることができるのが司祭であること、蜘蛛を柱に閉じ込めることができるのは信仰が深く、子供を守ろうとする人物であることからも、悪魔に対する信仰の勝利を読み取ることができる。悪を象徴する蜘蛛が柱に閉じ込められ、村が平和になるという結末からも、この小説が聖書的な勧善懲悪のストーリーを持つと考えることができるだろう。

『黒い蜘蛛』の作者であるゴットヘルフが聖書に対して深い理解を持っていたことは、本作品と聖書との関係に大きく寄与していると考えられる。ゴットヘルフは本名をアルベルト・ビツィウス（Albert Bitzius）といい、スイスのエンメンタール地方で牧師として働いていた。[3] ゴットヘルフの本業は聖職者として農民にキリスト教の教えを説くことであり、作家はいわば副業のようなものだったと言える。[4] ゴットヘルフの牧師と作家という二つの職業を考えると、やはり『黒い蜘蛛』に

---

[2] 『黒い蜘蛛』73 頁、76 頁参照。

[3] 聖職者としてのゴットヘルフについては、志村恵「ゴットヘルフは牧会者だったのか？—聖職者と文学者のはざま—」（北陸宗教文化学会（編）『北陸宗教文化』第 18 号、2006 年、57～72 頁）が参考になる。この論文で志村は、ゴットヘルフがスイスの改革派の牧師だったことから、ゴットヘルフの作品と牧師という職業の関係を論じ、両者の関係について、宣教の道具としての文学とするか、もしくは文学作品がもつ宗教的意図とするかという問題を提起している。

[4] ゴットヘルフの生涯については、佐々木翠「ゴットヘルフとカレンダー」（東京農業大学（編）『東京農業大学一般教育学術集報』第 11 号、1981 年、6～26 頁）が詳しい。ゴットヘルフの人生や社会的な背景、時代の流れを概観したこの論文の中で佐々木は、ゴットヘルフの牧師や作家としての側面だけでなく、教育家、政治家としての側面についても言及しており、「新ベルンカレンダー」制作から読み取れる、ゴットヘルフの教育に対する情熱と政治的な関心の関係を論じている。

聖書からの影響があることは疑いのないものになる。

『黒い蜘蛛』は聖書と深い関係をもつ小説だが、作中ではその影響はどのように表現されているだろうか。旧約聖書と新約聖書で描かれているエピソードと、明らかに関連していると考えられる本作品の場面を見ていこう。まず、村の農民たちが領主から一ヶ月で並木道を作る仕事を命じられ、城から嘆きながら逃げてきた場面である。並木道を作るためには遠くの森からブナの木を取ってこなければならず、生きていくための畑仕事をする時間がなくなり、食べる物がなくなってしまうかもしれない。農民たちが領主に対する恐怖と飢え死にの恐怖に嘆いているところに、悪魔が登場する。悪魔は泣くばかりで話を聞かない村人に対し、次のように言う。「(…) 新しいノアの洪水が起こるか、あんたたちの叫び声が空の星をはね飛ばしてしまうまで、そうやって吼えたてることはできるでしょう。」[5] ここで言われている「ノアの洪水」が、旧約聖書のノアの物語[6]を指していることは明らかである。ノアの物語では、アダムの遠い子孫であるノアが神に命じられて箱舟を作る。その後、神が起こした洪水によって世界は沈み、箱舟に乗りこんで生き残ったノアとその家族、そして選ばれた動物たちが新しい世界に増えていった。この物語をほのめかしながら、悪魔は世界が終わるまで泣いているつもりかと村人たちを揶揄しているのである。

悪魔との契約が行なわれる場面では、ためらったクリスティーネは「贖罪の山羊になる男がいればよいのに」[7]と考える。「贖罪の山羊」とは、旧約聖書でアロンが行なった儀式[8]に使われた山羊のことである。アロンは贖罪の日に儀式を行い、その儀式で用いられた山羊はイスラエルの人々の罪責と背きと罪を引き受けて、荒れ野の奥へ追いやられたとされている。クリスティーネは、悪魔と契約するという罪や背信行為を、自分の代

---

5 『黒い蜘蛛』54 頁。
6 「創世記」第 6～9 章。
7 『黒い蜘蛛』69 頁。
8 「レビ記」第 16 章 20～22 節。

わりに引き受けてくれるような存在を探して、このように表現しているのだろう。

さらに、二つめのエピソードでクリステンが司祭に会いに行く途中に、黒い蜘蛛を見つけて捕まえる場面を見てみよう。クリステンは子供に洗礼をしてもらうために、司祭に会いに行く途中で蜘蛛を見つけ、死を覚悟して蜘蛛を捕まえる。この場面ではクリステンが、「魂を主の御手にゆだねて、聖なる御言葉によって呪縛されたように同じ場所にじっとしている蜘蛛を強い手でつかんだ。」[9]と書かれている。「魂を御手にゆだねて」という言葉については、新約聖書にイエスが十字架の上で死んだ時に、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」[10]と言って息を引き取ったことが書かれている。クリステンが蜘蛛を捕まえるこの場面では、死を覚悟して蜘蛛を捕まえようとするクリステンを、十字架にかけられたイエス・キリストと重ね合わせているのである。そして、イエスに重ね合わされたクリステンが蜘蛛を柱に閉じ込め、村が平和になることで、神と悪魔の対決が神の勝利で終わることが示されている。

以上見てきたように、『黒い蜘蛛』には聖書と関連した言葉や表現が多く、単語や登場人物の名前がそのまま使われていることなど、その関係性は明らかで否定することができないものになっている。[11] しかしその一方で、『黒い蜘蛛』ではスイ

---

9 『黒い蜘蛛』166 頁。

10 「ルカによる福音書」第 23 章 46 節。

11 ここで取り上げたもののほか、聖書に関連する表現として「ヨナの唐ごま」(『黒い蜘蛛』146 頁) や「黄金の牛」(同書 146 頁) などが作中に登場する。「ヨナの唐ごま」は、ヨナ書で神がヨナのそばに生えさせ、一晩で枯れてしまった唐ごまの木を指すと考えられる。(「ヨナ書」第 4 章参照) ヨナ書では、唐ごまの木は一夜にして枯れてしまうので、栄えていたものが一瞬にして滅びてしまう儚さを象徴していると理解できる。『黒い蜘蛛』では、村の名声について「ヨナの唐ごまのように一夜にして枯れることなく、代から代へと続いた」(『黒い蜘蛛』146 頁) と表現されているので、村の名声がヨナの唐ごまの木のように儚いものではなかったことが述べられているのではないだろうか。さらに、「ヨナの唐ごま」という表現のすぐ後に「黄金の牛」が出てくるが、これは旧約聖書の「金の子牛」(「出エジプト記」第 32 章) という話と関係があると考えられ

スの農村の風習や食事が豊富になされており、これらを見逃すことはできない。[12]

『黒い蜘蛛』では食事の場面が細かく描写されているが、食卓に出される料理には、スイスやベルン地方に独特なものが多い。中でもツュッペとワイン粥がベルン地方独特の食べ物として詳しく描写されている。ツュッペは「極上の小麦粉に卵とミルクをいれてこね合わせ、美しい茶がかった黄色に焼き上げられ、編んだ女の髪のような形をした、一歳の子供ぐらいもあり、重さもほぼ同じである」[13]パンである。「ツュッペはベルン地方独特のパン菓子だ。」[14]とも書かれていて、これ以降にもツュッペが登場する場面があることからも、このパンがスイスのベルン地方の人々にとって欠かせないものであることが分かる。また、ワイン粥については、「昔ながらの美味いことベルン地方独特の粥は、ワインとトーストしたパンと、卵、砂糖、肉桂、およびサフランでできている。」[15]とあり、やはりベル

る。「金の子牛」は、エジプトから脱出した民衆が、モーセが山に登ったまま帰ってこないことを心配し、偶像崇拝が禁じられているにもかかわらず金で子牛の像を作り、その像を崇拝するまでになってしまったことによって神に罰せられる話である。聖書では「金の子牛」がきっかけになって、人々が堕落し神に罰せられたことが描かれているが、『黒い蜘蛛』では「金の子牛」という表現を使うことで、「ヨナの唐ごま」で暗示された、永遠に続くと思われた村の名声が次第に落ちていくことを表していると考えることができる。

このように、作中ではさまざまな場面で聖書と関係がある言葉が使われていている。紙面の都合上ここでは詳しく見ないが、「燃えるかまどから出てきた三人の男」(『黒い蜘蛛』32頁)や「ある時は子羊のように優しく、ある時は狼のように狂暴だった」(同書 153頁)なども同様に、聖書から影響を受けた表現だと考えることができ、本作品と聖書の関係の深さをより明確なものにしている。

[12] 『黒い蜘蛛』にはスイスに実在する地名が多数登場するので、スイスから切り離して考えることができない作品であることが分かる。Freund-Spork によると、『黒い蜘蛛』の舞台になっているのはゴットヘルフが牧師として生活した、スイスの実在の地方である。(Vgl. Walburga Freund-Spork : *Lektüreschlüssel. Jeremias Gotthelf: Die schwarze Spinne*. Stuttgart; Reclam, 2003. S39.)

[13] 『黒い蜘蛛』17頁。

[14] 『黒い蜘蛛』15頁。

[15] 『黒い蜘蛛』21頁。

ン地方の料理であることが読み取れる。作中では食卓に並んださまざまな料理が描写されるが、ベルン地方らしさを表す料理には特に焦点が当てられていて、スイスの地方らしさをはっきりと打ち出した描き方になっている。

食事の準備が整うと、洗礼式から帰ってきた客たちが食事を始める。食事は休憩を挟んで二回行なわれ、休憩のときに黒い蜘蛛の話が語られる。二回の食事の場面では、もてなす側ともてなしを受ける側のやりとりが詳細に述べられているので、詳しく見ていきたい。まず、一度目の食事で客たちが席に着き終わると、肉スープが運ばれてきて、スープが終わるとパン菓子のツュッペ、羊肉、牛肉、乾燥豆、梨、豚肉などが出てくる。[16] 二度目の食事でもあぶり肉やお酒が出てきて、非常に豪華な食事が提供されていたことが分かる。[17] そして、もてなされる客たちは、もてなしを受けた時に必ず一言添えるのが礼儀だったようだ。なぜなら一つめの黒い蜘蛛のエピソードが終わり、二回目の食事を始めるときに、客たちは蜘蛛が閉じ込められている柱に気をとられて、「またまたこんなにご馳走してくださってどういうおつもりなんでしょうね、とか、もう十分すぎるくらいに頂いたんですからとても食べられません、などといういつもの挨拶も忘れた。」[18]と書かれているからである。この部分からは、もてなされた人は一度遠慮するか、もしくは十分すぎるほどの量であるということをお礼として述べることが礼儀になっていることが分かる。[19]このことを踏まえると、洗礼式の前に代母が朝ごはんをご馳走になる場面が理解しやすくなるだろう。代母は家に到着するとコーヒーや軽食を出されるが、遠慮したあとでしか食事に手をつけない。さらにワイン粥を出されたときには、「もう食べてしまった」とか、「お腹

---

16 『黒い蜘蛛』24 頁。
17 『黒い蜘蛛』140,141 頁。
18 『黒い蜘蛛』138,139 頁。
19 Freund-Spork は、ゴットヘルフは本作品の舞台となった地方だけでなく、そこに住む人々の気質もよく知っていたと述べている。Vgl. Walburga Freund-Spork, a. a. O., S.39.

がいっぱいだ」という理由でなかなか食べようとしない。それに対して、もてなす側である家の夫人は、「おいしくないと思ってらっしゃる」とか、「上等なものを食べなれている人には手抜きと思えるのね」と言って、二人は食べる、食べないの押し問答になる。しかし最終的には、食べられないと主張していた代母は、出された食事を食べるのである。その様子は、「哀れな代母は手足をばたつかせて抵抗し、もう三日分も四日分も頂きましたわ、息をするのも苦しいほどですわ、と頑張ってみたが、すべてが無駄であった。年とったのと若いのと二人がかりで、なだめすかして、とうとう匙を握らせた。すると不思議や不思議。ひと匙、またひと匙、ちゃんとおさまってゆくではないか。」[20]となっている。結局はワイン粥を食べていることから、代母の食べられないという言葉がもてなされることに対する遠慮やお礼であること、家の夫人たちの態度が、遠慮はいらないから食べなさいという代母へのメッセージであると考えることができる。この場面における過度とも言える遠慮の仕方や、匙を握らせて食べさせる描写は、現代の日本人にとっては奇妙な風習のように思える。しかし、スイスが山岳地帯にあり肥沃な土地が少ない土地柄であること、この作品が書かれたのが 19 世紀であり、飽食の時代ではなかったこと、出された食事の内容が量、種類ともに現代であっても豪華なものであることを考えると、過剰なほど遠慮することによって、感謝の気持ちを示していると考えることができるのではないだろうか。[21]

---

[20] 『黒い蜘蛛』22 頁。

[21] ここでは食事について取り上げたが、自然や天気の描写もスイスらしさを表している。「山に陽が昇り、静かなせまい谷あいにきらめく光を投げる。[中略]自然の恵みによって、陽あたりのいい山腹の中ほどに肥沃で安全な台地がひらけ」(『黒い蜘蛛』9,10 頁) といった、山に囲まれた谷の村が朝を迎える様子が作品の冒頭で描写されている。スイスは山岳地帯にあるため、山に囲まれて生活する人々が多く、山の朝の描写で小説が始まることによって、スイスらしさを印象づけているのではないだろうか。また、作中では天気が劇的に変わる様子もたびたび描かれる。クリスティーネが悪魔と契

『黒い蜘蛛』は聖書と深い関連を持つと同時に、食事や人々の風習という点でスイスらしさも目を引く作品であることを見てきた。しかしこの作品においては、聖書とスイスらしさという、一見無関係に見える二つの要素が、実は密接な関係を持っているのである。

先に、スイスらしさが食事の場面で表現されていることを確かめた。ここで注目したいのは、食事の場面での登場人物の位置である。一つめの黒い蜘蛛のエピソードが終わり、客たちが再び食事を始めるとき、客たちは蜘蛛が閉じ込められているという柱を恐れて誰も上座に座りたがらない。そこで、家の主人が上座に座り、食事と二つめの黒いクモの話が始まる。ここでは人々がテーブルを囲んで座り、主人であるおじいさんの話を聞くという構図になっている。リーダーである人のまわりに人々が集まっているという図式や、数人で食事をしながら話をするという場面は、聖書にもしばしば登場する。聖書で最も有名な食事の場面は、最後の晩餐[22]であろう。最後の晩餐は、イエスが処刑される前に十二人の弟子たちと食事をし、裏切り者の存在を告げる話であり、新約聖書でも最も重要な場面の一つになっている。食事の場面で重要なことが語られるという点、指導者であるイエスの周りに人々が集まっているという点で、『黒い蜘蛛』の構図と共通している。また、聖書ではイエスが説教をする場面で、使徒や民衆がイエスのまわりに集まっている様子が散見される。マタイによる福音書では、山上の説教で

約する場面では、嵐であったのが、翌朝にはよく晴れて爽やかになった（『黒い蜘蛛』70,77 頁参照）と書かれている。さらに、村人の相談によって悪魔に子供を差し出すことが決まった場面では「山の上に黒い雲が頭をもたげ」と、山が多い地方らしい不安定な空模様が描かれていて、天候の不安定さ、劇的な変化もスイスらしい天気を表していると考えられる。

[22] 「マルコによる福音書」第 14 章 22～26 節や、「ルカによる福音書」第 22 章 14～23 節で「主の晩餐」として最後の晩餐の様子が描かれている。さらに、「ヨハネによる福音書」第 13 章 21～30 節にも同様の場面が描かれている。

イエスが群衆に教えを説いたことが述べられており、[23] マルコによる福音書ではイエスが群衆に対してたとえ話をして、その後弟子たちにたとえ話をする理由を説明した[24]と書かれている。イエスという指導者のまわりに人々が集まり、話を聞くという聖書の構図は、主人であるおじいさんの話を客たちが聞くという本作品の構図と共通点を持つと考えることができる。さらに、聖書には最後の晩餐以外にも食事に関する場面が多く、出エジプト記にはエジプトからシナイ山へ向かうモーセが、長老たちと神の前で食事をする場面がある。[25] モーセは舅のエトロから部下に民を治めさせ、重大な事件についてのみモーセが民を裁くという方法を教えてもらい、採用する。聖書のなかで、民衆統治について重要な示唆がなされる場面にも食事が現れているのである。また、創世記にはカナンへ逃げようとしたヤコブの話がある。ヤコブは追いかけてきたラバンと、これ以上ヤコブから搾取しないという約束を結び、お互いの土地の境界線を決めた後、一族を招いて食事をする。[26] この食事は約束を記念し、喜ぶための節目となる食事である。さらに、創世記ではサラがイサクを産むだろうという確約をアブラハムが神から得る場面でも、アブラハムが客である神に食事を用意する様子が描かれている。[27] この食事では、読み手は客が神であることが分かるので、印象深い場面になっている。[28]

---

[23] 「マタイによる福音書」第 5 章 1～2 節。
[24] 「マルコによる福音書」第 4 章 1～12 節。
[25] 「出エジプト記」第 18 章 12 節。
[26] 「創世記」第 31 章 46 節。
[27] 「創世記」第 18 章。
[28] 食事と同様に、スイスらしい天候の描写も聖書と関係があると考えられる。作中では、司祭が悪天候をおして外出することをためらう場面で、「雷鳴は彼のためらいを叱る神の怒りの声に変わった。」（『黒い蜘蛛』114 頁）とある。ここでは、神の声として雷が用いられているが、旧約聖書の「出エジプト記」でも神の声として雷が登場する。「モーセが語りかけると神は雷鳴をもって答えられた。」（「出エジプト記」第 19 章 19 節）のように、神の声として雷が使われるという点で、『黒い蜘蛛』と聖書の描写は共通している。さらに、太陽をネガティブに描くという点でも本作品と聖書は共通していると言うことができる。作中では太陽は、肯定的に描かれる場

以上のことから、聖書では食事とストーリーが密接に結びついていることが分かる。聖書では、食事の場面が重要な意味を持つことが多く、さまざまな出来事と食事が連続して描かれている。『黒い蜘蛛』でも、食事の場面で二つの蜘蛛のエピソードが語られているので、食事とこの作品は切り離して考えることができないものになっている。

『黒い蜘蛛』は、「ノア」のような聖書に出てくる言葉であるとはっきり分かる言葉を使っており、聖書と関係が深い物語である。それと同時に、作中にはスイスの農村らしい風習が描かれていて、これらは一見すると聖書とは関係がないように思われる。しかしながら、これらの自然や農村の風習も見方を変えると聖書と関連していることが明らかになる。このことから、本作品が聖書から影響を受けていることがより明確になる。『黒い蜘蛛』は聖書を思い出さずに読むことが非常に難しい短編小説だと言えるだろう。

合（「生きとし生けるものがみな楽しい生にめざめ、陽をあびてその命を喜ぶ」『黒い蜘蛛』9頁）と、熱で人を苦しめる、否定的なものとして描かれる場合（「暑い太陽も険しい道も彼の歩みをさまたげなかった」『黒い蜘蛛』93頁）の二通りある。太陽に対するネガティブなイメージは、日本人にはあまりなじみのないものだが、聖書でも太陽は否定的に描かれることが多い。たとえば「イザヤ書」に、「彼らは飢えることなく、渇くこともない。／太陽も熱風も彼らを打つことはない。」（第49章10節）とあるように、太陽の熱は飢えと同等に恐ろしいものであるようだ。神の声としての雷と同様に、太陽を否定的に描くという点でも、聖書と本作品に関連を見出すことができるだろう。